



ボランティアの世界への誘い^{いざな}

赤澤 清孝

みなさんは、ボランティア活動に参加したことがありますか。小学校や中高生の頃に、ボランティア活動に参加したことがあるという人も少なくないと思います。今から20年以上の前の調査になりますが、2002（平成14）年から2004年にかけて国立国語研究所が実施した「外国語定着度調査」（16歳以上を対象）によると、「ボランティア」という言葉の認知率は97.2%と、ほぼすべての人が「ボランティア」について見聞きしたことがあると答えています。また、「ボランティア」という言葉を「使ったことがある」と答えた人の割合（使用率）も86.2%と高く、この頃すでにボランティアは、かなり広く日本社会に定着していたといえます。

さらに調査によると「ボランティア」という言葉の「意味が分かる」と答えた人の比率（理解率）は90.8%でした。これも非常に高い割合です。では、この人たちに「ボランティアの意味」をたずねたら、返ってくる答えは果たして同じでしょうか。みなさんは、「ボランティアについて説明して」と問われたらどのように答えますか。おそらく多くの人イメージするボランティアとは「自分の意思で、困っている人を助けたり、海岸でゴミ拾いをしたりするなど、よりよい地域づくりに貢献する人（または活動）」というあたりでしょうか。では、これをもう少し掘り下げて考えてみましょう。

まず、「自分の意思で活動する」とはどういうことでしょうか。例えば、地域の高齢者向けにNPOが無料で行っているスマホ教室のボランティア募集の掲示物を見て、自ら連絡して活動を始めた大学生のAさんがいたとします。では、自分の意思で活動を始めたAさんに、「楽しいからやってみないか」と誘われて、いっしょに活動を始めたBさんは、自分の意思で活動したといえるでしょうか。あるいは、Aさんから「スタッフが不足しているので一緒に活動してほしい」と懇願されて活動することになったCさんの場合はどうでしょうか。さらに、大学の授業のレポー

ト課題として、ボランティア活動の参加体験を書くために、活動を手伝うことにしたDさんの場合はどうでしょうか。

また冒頭で、「ボランティア活動に参加したことがありますか」とたずねましたが、活動したことがあるという人は、その活動は本当に自分の意思で参加したといえるものでしょうか。自分の意思だったといえない場合、それはボランティア活動といってよいのでしょうか。ボランティア活動といえないなら、それは何といえはよいのでしょうか。

次に、「困っている人を助ける」ということについても考えてみましょう。ある団体では、世帯収入が国や地域の基準収入の半分以下の貧困家庭のこどもを対象に無料で通える塾を開き、大学生のボランティアがこどもたちに勉強を教えています。これは、困っている人を助ける活動といえますね。では、夫婦共働きで、収入は十分にあるけれども、夫婦とも仕事が忙しく、毎晩、勤め先からの帰宅が遅くなるために、小学生と中学生の2人のこどもの勉強の面倒をみることができない、というご家庭があるとします。このこどもたちの勉強の面倒をみることは、困っている人を助ける活動といえるのでしょうか。困っている人かどうかの線引きはどう考えたらよいのでしょうか。また、このこどもたちの勉強の面倒をみることは、ボランティアの活動としてふさわしいといえるのでしょうか。ふさわしい、ふさわしくないを判断する基準は何でしょう。「困っている人」とはこのような状況、状態のことだ、と明確に答えることは、なかなか難しいと思いませんか。

本書は、言葉は知っているけれど、掘り下げていくと説明することが難しい「ボランティア」や「ボランティア活動」について、さまざまな視点から考察し、その本質や可能性に迫ることをねらいとしています。

本書は3部構成です。第1部では、「ボランティア」を捉えなおす、と題して、それぞれが今もっている「ボランティア観」を見つめ直すとともに、新たな知見を得て、再構築していきます。第1章の「素朴な理解から読み解くボランティア」では、身近なボランティア活動を例に、ボランティアの基本的な原則について理解を深めます。第2章の「歴史を切り^{ひら}き拓いたボランティア」では、日本社会におけるさま

ざまな社会課題の解決にボランティアが先駆的、開拓的に取り組み、その後の社会システムづくりに大きな影響を及ぼした事例を学ぶほか、日本におけるボランティア活動の歴史を概観します。第3章の「データで示すボランティア」では、ボランティア活動に関するさまざまな調査の結果を基に、ボランティア活動や社会貢献についての個人の意識や行動の実態、さらには組織の視点から日本のNPOやNGOの実態や課題を考察します。そして、第4章の「理論からみるボランティア」では、個人がボランティアに参加する動機や、ボランティア活動がつくる人と人との関係性について、国内外のボランティア研究の成果を基に理解します。

第2部は「ボランティアの多様な領域」をテーマに、福祉(第5章)、医療・看護(第6章)、こども(第7章)、地域(第8章)、災害(第9章)、環境(第10章)、国際協力(第11章)の七つの領域において、ボランティア活動が必要とされる背景や、具体的なボランティア活動の内容、学生がそれらのボランティア活動に参加することで得られる経験や学びなどについて詳述します。関心のある領域のみ読んでもよいですが、すべての領域を読んでみて、ボランティアが果たす役割や活動を通じての学びに、どのような相違点があるのかを考えてみるのも面白いでしょう。

第3部はボランティアの多様な手法・実践がテーマです。第12章の「ボランティア活動実践のための演習」では、第1部、第2部の学習を踏まえて、ボランティアに関する理解をチェックするためのミニワークや、ボランティア活動プログラムの企画に役立つワークシートなど、実践に向けた学びの手法を紹介します。第13章の「ボランティアコーディネーション力を生かして学生目線で活動を運営する」では、ボランティア活動に参加するだけでなく、団体を立ち上げたり、団体の運営に参加する時に必要なボランティアプログラム開発の方法や仲間の集め方、資金調達の方法など、ボランティアコーディネーションの要点を解説します。

そして、終章では「ボランティアと社会デザイン」と題し、ボランティアが目指す社会像やその社会像を実現するための道筋を示しました。この他、それぞれの章の内容をより深めるための読み物として八つのコラムを設けました。コロナ禍やSDGs、ICTの活用といった近年の社会の動向とボランティア活動との関わり

やスポーツやアートといった比較的新しい分野のボランティア活動の特徴なども紹介しています。

このような構成にしたのは、学生みなさんに、単にボランティアに関する知識を理解してもらうだけでなく、実際にボランティア活動の実践に参加してもらいたいからです。実践のための準備として本書を活用することはもちろん、実際に活動してから読み返すことで、本書の内容への理解がさらに深まるでしょう。また、本書の執筆は、大学の教員とNPOで働くプロフェッショナルが担当しています。より正確に言えば、大学教員をしながら、NPOの代表者や理事、スタッフの仕事も兼務している人、そしてNPOで働きながら大学の非常勤講師として学生にボランティアに関する講義を担当している人たちが大半です。さらに言えば、大学生の頃に、ボランティア活動に参加し、その楽しさや奥深さに魅了され、大学を卒業した後も、ボランティア活動の研究や実践の現場に身を置いている、いい方を変えれば、ボランティア沼にハマってしままだに抜け出せない面々でもあります。

みなさんも本書で学んで、広く、深いボランティアの世界にぜひ飛び込んでみてください。